NUAL

名古屋大学全学同窓会
NAGOYA UNIVERSITY ALUMNI ASSOCIATION

Newsletter

No.23 平成 27(2015)年 3 月

NUAL（ニューアル）は Nagoya University Alumni Association の略称です。

撮影：Alexander Mahmoud ©Nobel Media AB

撮影：Alexander Mahmoud ©Nobel Media AB

Contents

特集1　赤﨑先生・天野先生の
ノーベル物理学賞受賞をお祝いして・・・・2
Celebrating the Nobel Physics Prize Win of Dr. Akasaki and Dr. Amano

特集2　第10回ホームカミングデイと
平成26年度全学同窓会近況報告・・・・・・4
The 10th Annual Homecoming Day and the 2014 NUAL Report

特集3　濵口総長インタビュー・・・・・・・・・・・・・・・6
Interview with the President, Professor Hamaguchi

活躍する会員たち・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
NUAL People in Action

同窓会ニュース・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
NUAL News

事務局からのお知らせ・・・・・・・・・・・・・・・・・・20
From the NUAL Office

ノーベル財団レセプションの様子
The award ceremony of Nobel Foundation

左上：左から 授賞式での赤﨑博士、天野博士
Upper Left: Dr. Akasaki (left) and Dr. Amano (right) at the award ceremony

撮影：Helena Paulin-Strömberg
©Nobel Media AB

名古屋大学特別教授の赤﨑　勇博士と名古屋大学大学院工学研究科教授の天野　浩博士が2014年ノーベル物理学賞を受賞されました。受賞決定当時や授賞式の様子、関連するエピソードを愛知工業大学澤木教授にご報告いただきます。また、今年度で任期を終えられる濵口総長に同窓会の役割や期待などを語っていただきます。活躍する会員たちのコーナーでは榊原副会長･宮池副会長にご登場いただきます。第10回ホームカミングディの報告や、丹羽副会長講演会、フィリピン支部創設の様子もお伝えします。

Dr. Isamu Akasaki, Distinguished Professor at Nagoya University, and Dr. Hiroshi Amano, Nagoya University Graduate School of Engineering Professor were awarded the 2014 Nobel Prize for Physics. Professor Sawaki of the Aichi Institute of Technology describes for us the moment the decision was made, the award ceremony, and some related episodes. President Hamaguchi, whose term is coming to a close this year, will also talk about the role and hopes of the Nagoya University Alumni Association. The “NUAL People in Action” column features Vice Presidents Sakakibara and Miyaike. This edition also includes a report from the 10th annual Homecoming Day, information about Vice President Niwa’s public seminar, and news of the establishment of a Philippines Branch.

特集1

赤﨑先生・天野先生のノーベル物理学賞受賞をお祝いして
Celebrating the Nobel Physics Prize Win of Dr. Akasaki and Dr. Amano

名古屋大学特別教授の赤﨑 勇博士と名古屋大学大学院工学研究科教授の天野 浩博士が2014年ノーベル物理学賞を受賞されました。受賞決定当時や授賞式の様子、関連するエピソードを愛知工業大学澤木教授にご報告いただきます。

Dr. Isamu Akasaki, Distinguished Professor at Nagoya University, and Dr. Hiroshi Amano, Nagoya University Graduate School of Engineering Professor were awarded the 2014 Nobel Prize for Physics. Professor Sawaki of the Aichi Institute of Technology describes for us the moment the decision was made, the award ceremony, and some related episodes.

愛知工業大学教授
名古屋大学名誉教授
澤木　宣彦

受賞のニュース

2014年10月7日夕方の6時45分、ノーベル財団のライブを研究室のPCで見ていて、「ISAMU AKASAKI」という声を聞いた。その直後に写されたスクリーンには、赤﨑勇先生（名古屋大学特別教授・名誉教授、名城大学終身教授）と天野浩先生（名古屋大学工学研究科教授）、それに中村修二先生（カリフォルニア大学サンタバーバラ校教授）の顔が見えた。10年以上も待った朗報だった。

毎年10月の初めになると、多くの報道機関と名古屋大学の総務課から発表当日の居場所を確認され、PCの前に座るのが恒例になっていたが、10年余を経てノーベル賞は理論物理などの高邁で庶民には縁遠い研究成果に授けられるものという思いが確信に変わりつつあった時だけに、この一瞬、半ば放心状態となったが、直ちに喜びで身の震えに変わった。

授賞式に招かれて

赤﨑先生のお招きで12月10日に執り行われたノーベル賞授賞式に参列する栄を頂きました。その授賞式で、スエーデン王立科学アカデミー会長は今年の物理学賞は「省エネルギーに貢献する白色LEDを可能にした高効率青色LEDを発明した業績」に与えられると述べられ、「今年のノーベル賞は人類に最大の貢献をした者に与えるとしたA. ノーベル氏の遺言に最も相応しい」と最大限の賛辞を送りました。赤﨑先生がスエーデン国王からメダルと賞状をもらわれたとき、会場となったコンサートホールの客席で見守る私は不躾にも自分が賞を頂いているような錯覚を覚え、喜びが全身を走った。赤﨑先生と天野先生のお仕事は「LEDが21世紀を照らす」という表現どおりエジソン以来の世紀の大発明で、永い永い努力を惜しまれなかったお二人に心からお祝いを申し上げたい。

ノーベル賞メダル
撮影：Lovisa Engblom
©The Nobel Foundation

誰もやっていないことに挑戦するときには失敗という概念が伴わない

赤﨑先生が私の上司として松下技研㈱から名古屋大学工学部に赴任されたのは1981年のことで、その時まで私はGaNという材料を知らなかった。同年5月、先生から渡された論文リストにGaN LEDという単語があり、その日から名古屋大学

受賞発表当日記者会見（名古屋大学広報プラザ）

ノーベル賞授賞式前の記念撮影（ストックホルム）

での青色 LED 研究が始まった。新任の赤﨑先生を狙って4月から研究室に加わった赤﨑研第1回生は、先生が松下技研から持ってこられたバラックを組み立てて実験に立ち向かったが、研究テーマは誰も成功したことのない高品質 GaN の結晶成長だった。全ての実験結果は学会での発表が許される成果となり、良い結果が得られなくても当事者には失敗という敗北感は全く無かった。今日の成果は一歩高みに上がることが出来たことを意味し、明日への勇気に繋がる。天野先生の「1500回以上の失敗」という言葉に悲壮感が伴わないのはこの故と思う。「新しいこと、誰もやっていないことに挑戦する」ことが若い人にとってどれだけ大切なことか。また、それに一心不乱に挑戦する若者の姿がどれだけ高貴なことか。赤﨑先生は後に「一人荒野を行く」と述懐されたが、当時はそのような感情を表に出されたことはなく、細かな指示もされず（自由で闊達）学生の活躍を暖かく見守っておられた。明確な目標をお持ちだった先生には「新天地を求める心豊かな旅」であったと推察する。

「自ら新研究分野をつくれ」

赤﨑先生の上司は日本で最初のトランジスタラジオを作製された有住徹彌先生で、赤﨑先生は私にとって同じ研究室（電子工学科半導体工学講座）の大先輩に当たる。有住先生も赤﨑先生も「人の真似をするな」「気が向かないことに手を出すな」と言われた。研究は自らの欲求に沿って行うべきものという研究者魂を教えて頂いた。「そのテーマの奥に横たわる本質を見極めよ」とも言われ、その研究成果が核あるいは基盤になって大きな研究分野が形成されるような研究を目指せと助言された。人の真似をしていたのでは当面の研究費はくるかも知れないが新研究分野を形成することは出来ない。この名古屋魂ともいえる研究姿勢を貫くことが出来たのは、温和でありながら自分の信念を曲げることのない「以和為貴」という渋沢初代学長の教えを受け継ぐ名古屋大学の学風にある。

渋沢初代学長の座右の銘

「研究室は母港」

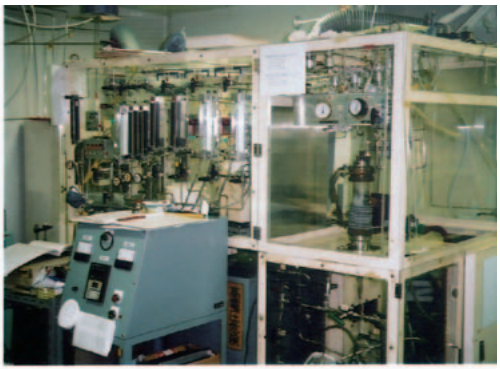
有住先生も赤﨑先生も実験室に顔を出されることはほとんど無く忙しくしておられた。しかし、毎週開かれる「輪講、ゼミナール」では非常に厳しく指導された。一方で、研究室は家族同然で、研究室旅行を楽しんだり、学生共々お宅にお伺いして奥様の手料理の御相伴にあずかったりした。毎年3月末に研究室を巣立つ学生には「困ったことがあればいつでも帰っておいで」と声をかけられ、「研究室母港論」を展開された。教員と学生の間の信頼感や「以心伝心」の間柄がこのような環境で育まれ、赤﨑先生と天野先生の30年余に亙る親子関係以上の「2人3脚」が続く基となった。

1985年夏の研究室旅行：蓼科高原にて
（後列に赤﨑先生と天野さん）

「ダイナマイトと白色 LED」

A. ノーベル氏はダイナマイトを発明してその特許料で巨額の富を築いたといわれる。スエーデンの国土は地殻が隆起して出来た岩盤の上に成り立っている。ダイナマイトの発明は19世紀末の港湾整備や鉄道・道路工事の効率を飛躍的に高めた。A. ノーベル氏は僅か63年の生涯で世界の土木工事に革命をもたらしたが、その源はスエーデンという国土がもつ必要性にあったと聞いた。青色 LED は白色 LED を生み、それが、世界の情報端末と照明装置に革命をもたらした。授賞式でスエーデン国王は赤﨑先生には2度の拍手を贈られた。「人類への貢献」という点で、青色 LED の発明はまさにA. ノーベル氏の仕事に比肩し、この度のノーベル物理学賞は彼の遺言に沿う誰にでも理解できる賞となった。本当に喜ばしい限りである。

1984年3月　第1期生修士課程修了・第3期生卒業記念
（前列左から3人目：赤﨑先生、後列右から3人目：M1の天野浩さん）


1984年9月に稼働した手作りの「MOVPE1号機」は D1 の小出康夫さんと M2の天野浩さんの共同作業によって整備された（1994年頃撮影）。

特集2

第10回ホームカミングデイと平成26年度全学同窓会近況報告

The 10th Annual Homecoming Day and the 2014 NUAL Report

名古屋大学全学同窓会代表幹事
伊藤　義人

天野浩先生への花束贈呈と記念写真

1. はじめに

2002年10月に大学の法人化を目前にして、「大学と社会を結ぶ組織」として、名古屋大学全学同窓会が設立されました。全学同窓会からも要請し、大学主催のホームカミングデイが平成17年度に初めて開催され、今年はホームカミングデイ10周年記念を迎えました。奇しくも、名古屋大学特別教授の赤﨑勇先生と名古屋大学大学院工学研究科教授の天野浩先生のノーベル物理学賞2014受賞決定を受け、プログラムを急遽一部変更して記念のおめでたいホームカミングデイが実施されました。設立から12年を経た全学同窓会の近況も含めて報告します。

2. 第10回ホームカミングデイ

10周年記念の第10回ホームカミングデイが、平成26年10月18日（土）に、「情報化社会における融和からの発展」をメインテーマとして行われました。ホームカミングデイ・ディレクターとして、私は6年目ですが全体をコーディネートしました。ノーベル物理学賞の受賞決定で、「名古屋大学の集い」などのプログラムを一部変更しました。そのノーベル賞効果もあり、参加者は昨年よりかなり増えて約4,500名になりました。

当日は天候にも恵まれ、盛況なホームカミングデイになりました。赤﨑勇先生は、受賞決定前は、豊田講堂で行われる「名古屋大学の集い」に奥様と参加される予定でしたが、一連の怒濤の取材などでお疲れになりご欠席になられてしまいました。天野浩先生には、ご参加いただきました。豊田講堂2階には、青色発光ダイオードの開発段階の実物、ポスターおよび持ち帰り自由の4大新聞紙の号外などを展示しました。

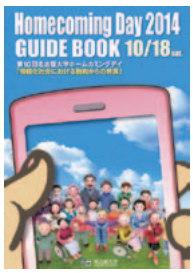
参加者全員に配った、名古屋大学の20の建物を緑線で手書きデザインしたオリジナルエコバックの中には、急遽、ノーベル物理学賞を特集した「名大トピックス」と全学同窓会の財政支援で作成した「ホームカミングデイ10周年記念写真集（法人化10周年の大学の歩みを多く含む）」などを入れました。

豊田講堂で13:30から開催された「名古屋大学の集い」は、平成23年名古屋大学教育学部卒業の浦口史帆さん（東海テレビ放送アナウンサー）の司会で始まりました。第1部は、濵口総長と豊田全学同窓会会長の挨拶の後、ホームカミングデイ・ディレクター兼全学同窓会代表幹事として、私から簡単にホームカミングデイの趣旨と実施行事、配付資料および全学同窓会の近況を報告しました。

次に、天野浩先生をお迎えし、花束と記念品を差し上げて、ご挨拶をいただいた後、天野先生を中心に記念写真を撮りました。マスコミのテレビカメラなどが一斉にフラッシュをたきました。

いつもの国際交流貢献顕彰の表彰では、全学同窓会のカンボジア支部長のマモーン・サムレト教授が欠席したため、ミャンマーのマンダレー大学のサン・サン・テイ教授とバングラデシュ農業大学のシャヒドル・ハク教授の2名に賞状と記念品が授与されました。

また、今回の新しい企画として、大学の国際化の一環とし



ホームカミングデイ
当日ガイド

ノーベル物理学賞受賞の横断幕

国際交流貢献顕彰受賞の記念写真

名フィルコンサート

海外支部歓迎会

て、日本人学生の留学を推奨するため、カンボジアへ留学した経験者の小田侑哉君（法学部3年生）と現在留学中の倉田淑実さん（法学部2年生）をインターネットでつなぎ、濵口総長を中心として留学で何が変わるかなどの話し合いが行われました。2人のご両親も会場に来られていたので紹介されました。非常に和やかな良い企画になりました。

「名古屋大学の集い」の第2部は、いつものように名古屋フィルハーモニーのコンサートを行いました。プログラムは、序曲「ウィンザーの陽気な女房たち（ニコライ）」、「フルート協奏曲第2番ニ長調 K.314（モーツアルト）」、「交響曲第6番田園（ベートーベン）」でした。指揮者（三ツ橋敬子）とソリスト（フルート：上野由恵）が共に女性という珍しい組み合わせになりました。アンコールは、上野さんが、（歌劇“オルフェオとエウリディーチェ”より“精霊の踊り”（グルック）」を、オーケストラは、「12のコントルダンス WoO.14より第6番ハ長調（ベートーヴェン）」でした。三ツ橋さんは、男前の指揮をする人と言われていましたが、その通りで非常にシャープな指揮をされました。最近の名フィルの定期演奏会より出来がよかったという感想がでました。

シンポジオンホールでは、学術講演会として、教育発達科学研究科が中心となって、米国からジャネル・バーリー・ホフマン氏をお呼びして、「“iRules”：ネット社会に対応した良識ある家族を育てるために」の題目で講演が行われ、その後討議が行われました。ホフマン氏は母親として、13歳の息子にスマホをプレゼントするときに、「親と子の間の18条の契約書」を同封したことで世界的に有名になった作家・実践家です。このことに関心を持った聴衆が多く来場されて、有意義な会になりました。

減災館の体験型の施設・展示は、今年初めてですが、減災連携研究センターの福和センター長が自ら説明され大変好評でした。

あかりんご隊科学実験、各種講演会、施設見学、農産物の販売、本のリユース市、名大創立75周年記念展（－あの総長の時代の名大－）、名古屋グランパススクールコーチによる親子ふれあいサッカー教室などの恒例の全学行事が行われました。また、学部・研究科および部局同窓会等主催の行事もたくさん実施されました。事故もなく、盛況の内にホームカミングデイは終了しました。

3. 全学同窓会の最近の状況

全学同窓会は、創設されて満12年を迎えましたが、平成25年度に初めて、単年度会計が黒字になりました。これまでは、創設のときの基金を少しずつ取り崩して大学支援をしてきましたが、以下の URL に示す同窓会カード（名古屋大学カード）事業が拡大しつつあり、会員数が当初目標の1万人を超え、収入が増えました。今年度からは、公募型の大学支援を100万円増額し年間400万円にしました。

http://www.nual.nagoya-u.ac.jp/information/card.html

海外支部については、平成25年度にインドネシア支部を立ち上げた後で、フィリピン支部設立について検討していました。まず、名大土木出身のオレタさん（デ・ラサール大学教授、支部事務局長）に連絡しておりましたが、齋藤元農学部長のはからいで、フィリピン人の中で2番目に学位を取得したコリアードさん（支部長）を紹介していただき、110名を超える留学経験者を発掘し、昨年12月20日（土）にマニラで、14番目の海外支部として発足しました。豊田会長ご夫妻と濵口総長も行っていただきました。

平成26年度の全学同窓会の新規事業として、講演会・夕食会を学士会と共催で実施しました。講演会は約140名、夕食会は46名の参加があり、大変好評でした。

日　時：平成26日11月26日（水）
講　師：丹羽宇一郎副会長（元駐中国日本大使）
場　所：坂田・平田ホール、グリーンサロン東山

名古屋大学全学同窓会は、まだ種々の課題を抱えていますが、今後とも、卒業生の皆様の物心両面のご支援をお願いいたします。

特集3

濵口総長インタビュー
Interview with the President, Professor Hamaguchi

総長室にて

昭和50年に名古屋大学医学部を卒業し、平成21年に総長に就任された濵口総長が平成27年3月末に6年の任期を終えられます。任期を振り返って思うこと、大学の発展および将来への思い、同窓会にまつわるエピソードや同窓生・同窓会への期待を語っていただきました。

President Hamaguchi, who graduated from Nagoya University Graduate School of Medicine in 1975, will end his six-year term as President of Nagoya University in March 2015. We asked him to look back on his term, and tell us his thoughts about the development and future of the university, as well as give some anecdotes from NUAL, and his hopes for the association and its members.

総長は最も得がたい仕事の一つである

総長は得がたい体験に満ちた仕事の一つだと思います。勉強する分野が多岐にわたり視野が広がったためです。また、たくさんの素晴らしい先輩方とお会いして、医学部以外の出身の方が持つ多様な個性やものの考え方に刺激を受け、企業の経営者とはこのような判断をするのかというのがわかり、大変勉強になりました。まるで18歳の時に戻ったような新鮮な体験を味わい、大学で新しい学問を学び始めた頃のようでした。様々な活動をさせていただいたことも、ありがたいことでした。加えて、私はとても幸運でした。総長になる前に、益川、小林、下村先生のノーベル賞受賞があり、最後のこの大団円のところでまた赤﨑先生と天野先生がノーベル賞受賞され、こんな幸せな時間を送れた総長というのは世界でもないだろうと思っています。

名大の個性と文化

名大にはノーベル賞受賞者を輩出してきた大学として唯一無二の文化や学風があり、“自由闊達”と“勇気ある知識人”という言葉で表現されています。それは、産業界においても豊田章一郎トヨタ自動車名誉会長、柴田昌治日本ガイシ相談役、丹羽宇一郎前中国大使、榊原定征経団連会長のような逸材が生まれることにつながっています。私の抱く名大の印象を一言で表わせば「門も塀もない大学」です。それは物質的な塀だけではなく、学部間・大学と社会・国と国との間の心理的な壁というものが非常に低いという意味です。グローバル化の時代、新しい価値は境界領域、辺境から生まれます。ですから、様々な大きな競争的プログラムを万全の体制で獲得できる大学であり、競争に勝ち残る体力のある大学という特色になっております。また、卒業生のサポートのおかげで、産業界との連携も非常に強くなってきました。

名大は地元の学生が多いとよく言われます。これは大学の特長でもあり弱点でもあります。その理由の一つは名大は地元にすごく愛されているためでしょう。また、卒業生の多くがこの地域の企業へ就職するのも特徴で、この地域のものづくりを相当支えていると思います。一方で、安定志向を好む傾向が生まれ易いとも思います。今のイノベーションの時代は多様性が必要です。価値観の多様性は新しいアイデアの源となります。その点を補完するため大学の国際化を図り、大学の中に多様な価値観とものの考え方を取り入れることが大きなミッションになります。各国からトップレベルの方を名大に招いて影響しあう環境づくりにより、学生には自分でも気づかないような新たな能力や可能性を目覚めさせる刺激を与えることが大事です。

大学の国際化

大学の国際化の基本は一番のキーワードである「名古屋大学からNagoya Universityへ」です。この6年弱の間に成果は上がりつつあり、留学生（大学院レベル）の割合が17パーセントぐらいになって予想よりもだいぶ増加しています。海外へ出かける日本人学生も5倍以上に増えました。次第に海外へ出かける勇気ある知識人の卵が育っていると実感しています。名大の国際化は単なる語学研修ではなく、他国で専門性の高いインターンシップや研修や調査研究をすることが大きな特長です。こうした取り組みで、元気な名大生が英語でディスカッションする光景を見ると嬉しく思います。また、名大の海外事務所やアジア・サテライト・キャンパスの設立は、おそらく日本の大学では最先端であると思います。様々な体験的学

習の機会ができたことを実感し、アジアの各国との連携が非常に強くなったと思います。また、ノースカロライナにはリエゾンオフィスがあり、欧米の大学とのダブルディグリーもスタートしており大学院の質の向上が図られています。その結果、名大は他国の政府や研究機関から高い評価を受けました。ベトナム司法省との交流協定を交わしたことや去年の9月にケンブリッジのセントジョーンズ校と交流協定を交わしたことが例として挙げられます。これらの手応えを嬉しく感じております。

名大の人材育成

また、私の任期内に始め、とても大事にしているのは、YLC（Young Leader Cultivation）プログラムです。これは大学で初めての、本部の費用で分野を問わずに助教を育成するプログラムで毎年10名前後採用しています。今年で5年目ですが、5年前に採用した人は全員就職先を得て評価も高いです。このプログラムは助教の質を保証し、人材育成としても、名大が他大学に研究者を送り出せるような大学になっているという実感もあります。名大はやはり若者を育てる伝統を大切にする大学です。ノーベル賞受賞者6名の歴史がまさにそれだと思います。皆さんのほとんどは20代から30代に、受賞した核となった研究に従事していました。若者の力は、ものすごく大事です。そして、その若者を丁寧に指導してきた素晴らしい指導者にも恵まれていた。それがノーベル賞受賞へつながっていると思います。

名大の将来像

主観的な見方ではありますが、名大は遅咲きだけど大きく個性のある人が育ってくる大学だと思います。したがって、名大の人材育成のカラーとして、自己認識に関してもう少しポジティブな部分も持ちながら、その特性を伸ばすオリジナルな現場を作り上げるのが大きな課題です。現在は価値観の多様化の中、様々なものの生産も個人の特性に合ったものに変わってきています。パーソナライズした教育を通して本人の中に眠っている可能性を花開かせるような豊かな環境があれば、研究者の能力もより高まってくると思います。キーポイントは自由闊達です。多様な価値を受け入れるというのが、大事な価値観だと思います。お互いに独自の文化に対するリスペクトがまず必要だと思います。それを教えることができる現場というのは、大学だと思います。大学という装置が、単に知識、技術を体系化し、整理して次世代につなぐという装置としての機能を果すだけのものから、次世代の安定した持続可能性を拓いていくための科学技術の発展や思想の展開、哲学の進化、国際協力、学術的なネットワーク形成など巾広い分野で大きな役割をもつ存在へ変化しつつあると思います。

同窓会の役割

全学同窓会には本当に助けられました。特に同窓会支部の立ち上げ等、齋藤名誉教授（元農学部長）始め、多くの方に骨身を惜しまずご支援いただいたおかげで、日本の中でも本当に稀有な大学になってきたと実感しております。任期中、新たに7ヶ所の海外支部を立ちあげ、現在それは14ヶ所となりました。それもこれも先輩たちのご支援のおかげだと思います。豊田同窓会長をはじめ、ご支援いただいたのを本当に実感しております。現地の同窓生のご支援のおかげで、国際化の一環とする名大現地事務所法人格を苦労せず取ることができました。また、同窓会の活力が大学の教育研究の大きな力となっています。語学研修で日本人の学生を送ると、ホームステイや現地企業のインターンシップなど今までにないご支援をしていただけるようにもなってきました。

全学同窓会に期待すること

同窓会が自分の青春時代を懐古する組織にならず、今の自分をさらに充実させるために必要な組織として、同窓会活動がもっと広がることが大事です。また、部局同窓会間のネットワークがより広がることも必要であり、部局を超えた全学同窓会がとても大事です。全学同窓会は国境を越えて、文化を越えて、生涯、お互いに切磋琢磨して勉強していく、そういう人間関係が構築できる組織になっていくことを願っております。そのため、日本人卒業生に限ってみると、同窓会への若い世代の参加はまだまだ少ないです。卒業したら終わりというのではなくて、一生涯、いろんな意味でお互いに刺激し合うようなネットワークを作って頂くよう期待しています。

ライナーホーネック氏×東海学生オーケストラジョイントコンサートに於いて
指揮する濵口総長

活躍する会員たち　NUAL People in Action

「活躍する会員たち」では、同窓会会員の各界におけるご活躍ぶりを紹介しています。第23回は、本同窓会副会長のお二人にご登場いただきます。工学研究科を修了され日本経済団体連合会会長・東レ株式会社取締役会長の榊原定征さん、また、工学研究科を修了され中日本高速道路株式会社代表取締役社長 CEO・中部電力株式会社顧問の宮池克人さんにお話いただきます。

The “NUAL People in Action” column features our alumni/ae playing active roles in various fields. For our 23rd edition, we will hear from two of NUAL’s own vice presidents. Mr. Sadayuki Sakakibara graduated from the Graduate School of Engineering and is now Chairman of Keidanren and Chairman of the Board of Toray Industries, Inc., Mr. Yoshihito Miyaike is a graduate of the Graduate School of Engineering, President and CEO of Central Nippon Expressway Company Ltd. and Advisor to Chubu Electric Power Co., Inc.

榊原（さかきばら）　定征（さだゆき）さん

■略歴

1943年3月22日生
1965年3月　名古屋大学工学部応用化学科卒業
1967年3月　名古屋大学大学院工学研究科
　　修士課程（応用化学専攻）修了
1967年4月　東洋レーヨン（現東レ）入社
2002年6月　代表取締役社長
2010年6月　代表取締役会長
2014年6月　取締役会長

■主な社外団体役職歴

2004年4月～2014年3月　名古屋大学経営協議会委員
2014年5月～　日本化学会　会長
2014年6月～　日本経済団体連合会　会長
2014年6月～　経済産業省　産業構造審議会　会長
2014年9月～　内閣府　経済財政諮問会議　議員

1. 大学時代～東レ

私は名古屋大学では工学部で有機合成化学を専攻し、大学・大学院時代は、新規化合物の合成実験に日夜を問わず取り組んでいました。その後、1967年に東レに入社し、研究者として社会人生活をスタートしました。この頃の日本は戦後の経済復興を経て、高度経済成長の真っただ中にありました。企業や社会全体がかつてないダイナミズムを引き起こし、日本中が大変な活気に満ちあふれていたことを覚えています。

その後、私は、アメリカ駐在や経営企画室などを経て、2002年、東レの代表取締役社長に就任しました。社長就任当時は、東レが経営的に大変に厳しい時期でしたが、徹底的な改革に取り組むとともに、事業のグローバル化を進める一方、ボーイングとの炭素繊維の長期契約や、ユニクロとのヒートテックやウルトラライトダウンの共同開発の推進などにより、会社の再建を果たしました（図1）。その後、2010年に社長を退き、代表取締役会長に就任しました。

図1：炭素繊維とボーイング787（上段）、ユニクロのヒートテックとウルトラライトダウン（下段）

2. 経団連会長に就任して

経団連会長就任の打診はまさに「青天の霹靂」でしたが、天命と受け止め、引き受けることとしました。そして、昨年の6月3日、住友化学の米倉会長の後を引き継ぎ、第13代経団連会長に就任しました（図2）。

図2：経団連第12代会長 住友化学米倉会長と

名古屋大学からは、第8代経団連会長を務められたトヨタ自動車の豊田章一郎名誉会長以来、私で二人目の経団連会長となります。第7代の東京電力の平岩外四会長も第八高等学校の卒業ですから、三人目と言えるかもしれません。

さて、私は経団連会長に就任以来、「日本経済再生」「日本再興」を最重要課題に掲げています。日本はこれまで、失われた20年と呼ばれる長期停滞に苦しんできました。名目GDPは93年度の489兆円に対し、13年度は483兆円と20年前の水準を下回っています。グローバル化が急速に進んだこの20年間、世界各国が成長を続ける中、日本だけが世界の成長から取り残されてしまいました。このまま手をこまねいている限り、日本から「ひと」は減り、「まち」は消え、「しごと」は無くなります。このような危機感を、政府、企業、国民が共有し、オールジャパンで日本再興に取り組み、私が社会に出た頃のような、経済・社会のダイナミズムを取り戻していく必要があります。「強い経済・強い日本を取り戻す」ことを最重要課題に掲げる安倍政権が、デフレ脱却・経済再生への取り組みを進めている今こそ、日本にとって最大の、そして最後とも言える好機が到来しています。

こうした考えから、私は今回、経団連の将来ビジョンをまとめ上げました。それが今年の1月1日に公表した「『豊かで活力ある日本』の再生－Innovation & Globalization－」です（図3）。

図3：安倍総理へ経団連ビジョンを手交

ポイントを紹介しますと、日本が2030年までに目指すべき国家像として、

①豊かで活力ある国民生活を実現する
②人口1億人を維持し、魅力ある都市・地域を形成する
③成長国家としての強い基盤を確立する
④地球規模の課題を解決し世界の繁栄に貢献する

を掲げました。こうした国作りのために、我々が取り組むべき重要政策課題は山積しています。震災復興の加速、原発の早期再稼働、法人実効税率の引き下げ、社会保障給付の重点化・効率化、中国・韓国との経済交流の拡大、TPPなど経済連携協定の推進、外国人材の受け入れ、女性の活躍推進など、どれも日本再興に欠かせないものばかりです。様々な痛みや社会的摩擦を伴うことがあるかもしれません。痛みや摩擦を厭わない勇気を持って取り組めば、日本は再興できると、私は確信しています。

3. 名古屋大学に期待すること

先ほど述べました経団連の将来ビジョンの中で大学改革についても触れています。それは、現在の国立大学を3つのカテゴリー、つまり最先端の研究拠点、地域の中核拠点、教育研究拠点の3つに分化させるというものです。名古屋大学は、多くのノーベル賞受賞者を輩出しており、間違いなく世界トップレベルの研究拠点と言えます。また、海外の優秀な教員の招聘や、大学の基礎研究と企業の技術を融合させる産学連携にも積極的に取り組んでおられます。このように、名古屋大学には、今後とも是非、世界から第一線の研究者が集まる優れた研究環境と高い研究水準を誇る世界トップレベルの最先端研究拠点として、国際的に確固たる地位を築かれることを期待したいと思います。

また、研究拠点と同時に、グローバル人材の教育拠点としても成果を挙げていただきたいと思います。アジアをはじめとする海外から優秀な留学生を多く受け入れるとともに、多くの名大生に海外で学ぶ機会を提供していただきたいと思います。私の経験からお話しますと、私の人生の大きな転機となったのが、3年間のアメリカ生活です。私はまだ30代前半と若かったのですが、研究担当として現地の大学や企業を訪れる中で、一流の研究者や企業人の謦咳に接する機会を得ました。そこで語学力や交渉力が鍛えられたほか、世界へと目が開かれ、アメリカ人の考え方や文化も理解できるようになりました。こうした経験を、是非、今の若い方々にも味わっていただきたいと思います。若ければ若いほど、グローバルな発想や視野は身につきやすいものです。学生時代に国際的な経験を積めば、社会に出たときに大きな力になると思います。名古屋大学には、そのための英語教育の強化も積極的に推進していただきたいと思います。

今後も名古屋大学には、世界や時代を変革する新しい価値や人材を次々と輩出されることを期待しています。

みやいけ　よしひと
宮池　克人さん

■略歴
1971年3月　名古屋大学大学院　工学研究科　修了（土木工学専攻）
1971年4月　中部電力株式会社　入社
1989年5月　名古屋大学　工学博士号取得
2005年6月　同社　常務取締役執行役員
2007年6月　同社　代表取締役副社長執行役員
2013年6月　同社　顧問
2014年6月～　中日本高速道路株式会社　代表取締役社長 CEO

中日本高速道路㈱に転職して半年程になりました。2005年、旧日本道路公団が分割・民営化されて設立された会社の一つです。

中部圏や首都圏で、供用延長約2,000kmの高速道路を維持・管理する一方、新東名、新名神など、高速道路のネットワークづくりのための建設事業も行っています。

私は、40年有余、専ら電気事業に携わって参りました。2013年、第一線を退き、第二の人生へ歩みを進めようとしておりました昨年、転職のお話をいただきました。高速道路事業は、電気事業と同様、「ライフライン」の一業種であり、電気事業での実務経験もお役に立つことができるのではと、ありがたくお受けさせていただきました。

電気・ガス・水道・道路・鉄道・通信などの社会インフラは、現代文明社会を支えていくうえで、欠かすことのできないもの。災害などで長期にわたり利用が制限されると、我々の生命に危機が及ぶということで、ライフラインとも呼ばれています。

我国は、高度経済成長期に建設された社会インフラの老朽化という問題をかかえております。本文では、高速道路の老朽化についてご紹介したいと思います。

「工業国にして、これほど完全にその道路網を無視した国は、日本の他にない」（ワトキンス調査団報告書1956）と表現された状況から、公団による有料道路方式で、我国の高速道路の建設が始まりました。高度成長期を通じて、早いスピードで延長を延ばし、現在東・中・西日本の3高速道路会社が供用している距離は、約9,000 km に及んでいます。

しかし、これらのうち、開通から30年以上経過した区間が、約40%を占めるに至り、老朽化対策の必要性が顕著になっています（下図）。

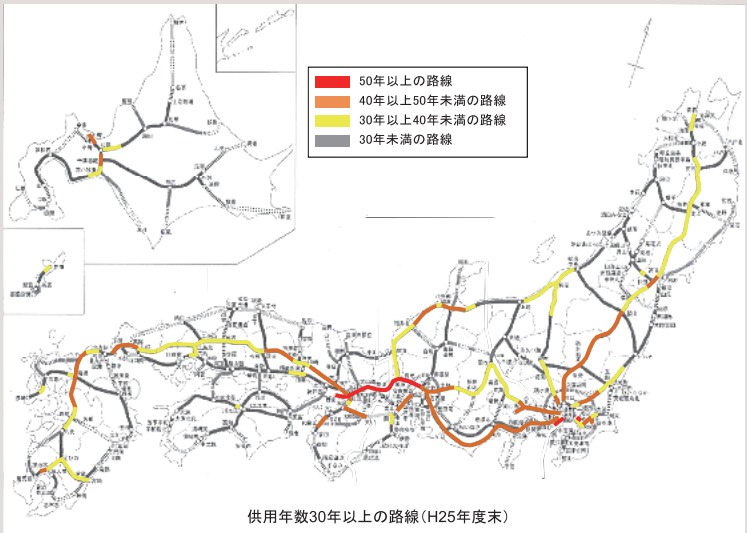
高速道路先進国アメリカでは、1930年代、ニューディール政策により大量に建設された道路が、そのメンテナンスに十分な予算が投入されなかったため、1980年代に入って、老朽化による橋梁崩落や舗装の損傷による通行止めなどが頻発しました。このことは「荒廃するアメリカ」（1981）に詳しく述べられています。

我国では、2012年12月に発生した笹子トンネルの天井板崩落事故が、インフラの老朽化がインフラサービス全体への信頼と国民生活の安全安心を脅かすものとして、注目されました。

笹子トンネルは、弊社の管理下にあり、二度とこのような事故を繰り返すことのないよう、道路設備全般にわたり、総点検と安全対策を2015年度完了を目指して、取り組んでおります。

道路の老朽化は、舗装・橋梁・トンネル・盛土・切り取り法面など、様々な設備に見られます。ここでは、とくに老朽化を著しく加速している要因を紹介します。

我国では、高速道路の供用開始以降、大型車輌の交通量が著しく増加するとともに、規制緩和により、車輌の総重量が増加傾向にあります。加えて、大型車輌の約25%が総重量を超過して日常的に走っている実態があります。このような



高速道路路線と経過年数

橋梁床版部分の劣化状況

想定を超えた厳しい使用環境下では、橋梁の鉄筋コンクリート床版のコンクリートの土砂化や剥離、鉄筋の腐食などの劣化が急速に進展しますし、また、桁、ジョイントなどに、部材の亀裂の進行が助長されます（上図）。

加えて、冬季に路面の凍結防止を目的として散布する塩（塩化ナトリウム）は、鉄筋や鋼材の錆による劣化を進めますし、建設時に骨材として「海砂」を使用したコンクリートや「シリカ成分を含んだ骨材」を使用したコンクリートも、コンクリート材料としての急速な劣化がみられます。

これらの要因によって、通常の維持修繕のみでは、将来にわたり安全に使用していくことが困難な状況に陥ると考えられる設備について、将来にわたり長く使用できるよう、必要な箇所を計画的に修繕していく、大規模更新・修繕計画がスタートします。このためには、道路の通行を確保しながら、大規模な工事を進めていく必要があり、激しい渋滞を回避すべく対策を打ちながら、今後約15年間の期間をかけ、高速道路3会社で総額約3兆円の費用を使って進めていく予定です。

「N²U-BRIDGE（ニューブリッジ）」

名古屋大学構内の鏡ヶ池畔には、様々な劣化・損傷が生じ撤去された橋梁部材を全国から集めた「N²U-BRIDGE」があります。これを活用し、臨床型の橋梁の維持管理技術者の養成にも広く活用されています。大学のこのような先見的取り組みや、維持管理技術の研究開発は、道路はもとより、広く社会インフラの老朽化対策問題に、今後も大きく貢献していくものと期待しています（左図）。

今日、高速道路3会社をご利用いただく車の利用台数は、1日約700万台、国内の陸上貨物輸送の48%に高速道路を利用していただいており、我国の社会・経済活動を支えていると言えます。

また、東日本大震災をはじめ、豪雨、豪雪などの経験から、災害時には緊急輸送路として重要な役割を担っています。

名神高速道路の開通以来50年にわたり、日本経済と国民の安全・安心を支えてきた高速道路ネットワークの機能が、その価値を高めながら、永続的にその役割を果たすことができる様、微力ながら貢献できればと思っております。

同窓会ニュース　NUAL News

名古屋大学全学同窓会フィリピン支部創設される

平成26年12月20日（土）に、フィリピンの首都マニラの中心街から少し離れたEDSA Shangri-laホテルのSantan Roomで、名古屋大学全学同窓会の14番目の海外支部となるフィリピン支部の設立総会が行われました。事前に卒業生等電子名簿と関係者の努力によって、フィリピンには110名を超える名古屋大学の留学経験者がおり、22名のフィリピン人現役学生がいることが分かっていました。

設立総会には、大学側からは濵口総長、齋藤哲夫名誉教授（生命農学研究科、元農学部長）、伊藤勝基名誉教授（医学系研究科、大学参与）、山内章教授（生命農学研究科）など9名の大学関係者にご出席いただき、全学同窓会からは、豊田章一郎会長ご夫妻、中野富夫准教授（連携委員会委員長）と代表幹事の私が参加致しました。フィリピン側は、留学経験者だけでなく、フィリピン駐在の日本人同窓生およびフィリピン日本大使館から3名の方々も来られ、総計72名の参加となりました。7テーブルに分かれて着席しての会となりました。

フィリピンのマニラは、この時期は乾期の始まりで、昼間の陽のあたる場所は名古屋よりかなり暑かったですが、夜はエアコンを付けずに過ごすことができました。夕方、雨（スコール）が降っても30分程度でやみました。マニラは、交通渋滞がひどく、定刻に集まれるか心配されて、豊田会長ご夫妻は、2時間以上前にホテルにおいでになりました。参加者の集まりがよく、総会の開始は、予定通り11時きっかりでした。

司会は、留学経験者のDr. Cynthia P. Saloma（1993年理学卒業、女性）と鈴木勇さん（1985年経済卒、大成建設フィリピン社長）の2人で、英語と日本で行われました。

今回の設立総会は、1時間半をかけて、これまでの海外支部に比べると、かなりフォーマルな形での式典となりました。まず、最初に全員が起立してフィリピン国歌斉唱を行い、その後、開会の辞が、Dr. Pag-asa Gaspillo（1995年論文博士（工学）、デ・ラサール大学副学長）からありました。名古屋大学からの代表団の歓迎と支部設立の意議を述べられました。日本のJDS（人材育成奨学プログラム）などへのお礼も述べられ、今後のフィリピンと日本の友好促進が進むことを希望されました。

次に、豊田会長ご夫妻と濵口総長などの日本からの代表団12名の紹介を私からしました。時間がないということで、お名前と所属をお呼びして、起立していただきました。フィリピン支部の25名の同窓生については、支部の事務局長のDr. Andres Winston Oreta（1994年工学博士、デ・ラサール大学教授）から、スライドに顔写真などを示しながら紹介がありました。さらに、フィリピン駐在の日本人同窓生の参加者11名の紹介が鈴木さんから、同じくスライドを使ってありました。フィリピンに出張中で、急遽参加いただいた環境学研究科の森川高行教授と谷川寛樹教授およびそのフィリピン人学生と在フィリピン日本大使館からの3名の参加者についても紹介がありました。

豊田会長から支部認定証と富士山の絵柄の記念絵皿（裏に全学同窓会の記銘）の贈呈が、支部長（1982年農学博士、Dr. Cristino Collado）にされました。次に、濵口総長から全学同窓会が日本で作って持って行ったフィリピン支部旗の贈呈が行われました。

豊田会長から支部設立の挨拶があり、全学同窓会が名古屋大学と社会を結ぶ必須の組織として設立されたことと、14番目の海外支部であるフィリピン支部には名古屋大学の国際化に貢献いただきたいという内容でした。その後、濵口総長の挨拶が続いて行われました。赤﨑先生と天野先生のノーベル物理学賞の受賞に触れられた後、アジアサテライトキャンパス学院の設立などによって、今後アジア地域との連携を深めたいので、協力を依頼されました。フィリピンの研究施設を見学された経験からもっと早くフィリピンに来るべきであったという反省も述べられました。

次に、フィリピン支部の8名の役員が壇上に上がり、役割担当の紹介の後で、

豊田会長から支部認定証と絵皿の贈呈

濵口総長から支部旗の贈呈

右手を挙げての決意表明の宣誓がありました。この後に、フィリピン支部から豊田会長夫人に花束と、豊田会長と濵口総長に記念品が贈呈されました。

フィリピン支部が制作した名大ニュースレター（MEIDAI NETWORK）の創刊号の紹介がスライドでありました。表紙に、豊田会長と濵口総長の写真がありました。

この後で、Collado 支部長の大変丁寧な挨拶がありました。今回の支部設立に貢献された名古屋大学と全学同窓会関係者の名前を全て挙げて、まず感謝をされました。特に、今回の支部設立に大変尽力された齋藤元農学部長は、彼の恩師でもあり、大変感謝しておられました。今後の支部が名古屋大学の国際化に貢献して、大学との絆を深めたいということでした。彼は、元農業副大臣もされた経験があり、大変立派な挨拶でした。

最後に、名古屋大学へのフィリピンからの最初の留学生であった Dr. Joseph Masangkay（1983年農学博士、フィリピン大学名誉教授）から閉会の辞がありました。

この後、すぐに同じ場所で、給仕付きの昼食会になりました。最初に Collado 支部長により、赤ワインによる乾杯が行われました。昼食会の最後に、参加者全員による集合写真を撮りました。

終了後も、支部旗を囲んで、複数のグループが記念写真を撮っていました。フィリピン人の留学経験者は、支部設立を大変喜んでおり、設立総会については参加者全員が満足した、非常にアットホームな雰囲気で心のこもった良い総会になったという感想をいただきました。

今回の支部設立に関しては、全学同窓会連携委員会委員長の中野先生を中心にフィリピンとの連絡を取っていただきました。最初は、私の所属している社会基盤工学専攻の修了生である Oreta 事務局長に連絡をとり、フィリピン人留学経験者の情報を集めてもらっていました。大学関係者はある程度判明しましたが、齋藤先生から30年前からの教え子に連絡を取っていただき、Collado 支部長を紹介いただき、Oreta 事務局長と連携をとっていただき事前に支部役員候補を決めるとともに、設立総会の準備をしていただきました。ここに、今回のフィリピン支部設立に貢献された方々に厚くお礼申し上げます。（伊藤義人）

記念写真

丹羽宇一郎氏講演会および夕食会

平成26年度の名古屋大学全学同窓会の新規事業として、学士会と共催の講演会と夕食会が初めて開催されました。講演会は、平成26年11月26日16時から、学内の理学南館1階の坂田・平田ホールで実施されました。講演者の名古屋大学全学同窓会副会長の丹羽宇一郎氏は、学士会の理事でもあり、両組織主催の第1回目の講演会の講師としてお願いしました。講演会の司会は、全学同窓会代表幹事の私がしましたが、両組織の主催者挨拶は省略して、丹羽氏の経歴を簡単に紹介した後、直ぐに講演に移りました。

参加者は、総長をはじめとする学内構成員と全学同窓会の柴田副会長や岡田副会長をはじめとした卒業生と公募した一般市民で、合計約200名でした。野村元副学長などの名誉教授の方々も多く参加されていました。学内では、若手の教員や学生も参加しており、多様な人達が参加した講演会になりました。

講演題目は、「グローバリゼーションと日本の将来」というもので、スライドを使いながら、全権日本大使をされていた時に、中国全土を回られたときのお話や、最近の中国の政治情勢と経済情勢および関連した日本の将来に関して講演をされました。中国の共産党第18期中央政治局委員25名の顔写真のスライ

丹羽全学同窓会副会長

ドを使って、政治局常務委員7名（チャイナセブン）の内5名は、第1期で定年となるので、第2期にチャイナセブンになる可能性の高い有力な政治局員についても話されました。個人的にも丹羽氏はよくご存知だそうです。

中国経済については、1950年代以後の状況と日本の戦後から今日までの状況を比較され、今後は中国の経済成長も鈍化することを具体的数字によって示されました。世界の GDP の67%、人口の54%、国土の48%をアジア26ヶ国が占めており、GDP 上位4ヶ国である中国、日本、インド、韓国の経済の重要性を強調されました。各所で、スライドにはない重要な数字が正確に何も見ずに講演の中で出てきて、論理的なつながりがよく分かったという参加者の感想が後で出ました。非常に高度で、かつ、新聞などのマスコミからは得られない貴重な情報を多く含んだ講演会になりました。

講演会終了後、グリーンサロン東山に移動して、夕食会を実施しました。この夕食会は、少人数で実施するため、講演会参加者の中から全学同窓会と学士会の会員に限定して希望者をあらかじめ募っていました。結局、43名の参加になり、着席バイキング方式で行われました。

最初に、主催者を代表して全学同窓会の柴田副会長から

夕食会場の様子

丹羽氏への講演のお礼と参加者への歓迎の挨拶があり、その後、大学を代表して濵口総長より挨拶がありました。簡単な挨拶と乾杯が、もう1つの主催組織である学士会の久保理事長よりされました。各テーブルに空き席が1つ用意され、参加者は任意に移動して、多くの人と懇談できるように工夫しました。夕食会の終了前に、松尾次期総長の挨拶があり、中締めを全学同窓会の岡田副会長がされました。大変和やかでよい夕食会であったという感想を多くの参加者からいただきました。

（伊藤義人）

大学支援事業目録贈呈

11月6日（木）、平成26年度第3回幹事会において、全学同窓会大学支援事業（平成26年度第1回）採択者に目録が贈呈されました。

今回は、11件の応募総数から、表の5件が採択されました。事業の内容は、実施後に本誌で紹介され、全学同窓会 HP でも公開されます。また、これまでに採択した事業を全学同窓会 HP で公開しています。

平成26年度第1回　採択事業

申請者所属・氏名		事業名
国際教育交流センター キャリア支援部門　特任講師	今井　千晴	同窓会タイ国支部との連携強化、および バンコクオフィスとの連携による学生派遣事業
国際開発研究科　研究科長	伊東　早苗	「真の多文化共生を目指すパブリック・ アウトリーチ・プロジェクト in 名古屋（POPIC） ～地域のために、地域と共に～」
国際教育交流センター アドバイジング部門 ソーシャルサービス室　特任教授	坂野　尚美	障がい留学生の修学支援と地域住民との連携を 目指して
国際教育交流本部・ バンコク事務所　所長 / 理事	渡辺　芳人	「名古屋大学ミニホームカミングデイ in バンコク」 の開催
学生相談総合センター 就職相談部門　助教 （就職相談員）	船津　静代	「就サポ presents ～これからのキャリアについて 共に考える」

採択事業代表者の方々

支部・部局便り　News from the Alumni Associations of Different Schools and Regions

部局や地域ごとの同窓会から寄せていただいた便りを掲載します。それぞれが全学同窓会と連携しながら活動しています。

Here you can find announcements and news from alumni associations of schools and/or regions. These associations and NUAL are cooperating with each other to everyone's benefit.

関東支部　NUAL Kanto Branch

2014年11月26日に全学同窓会・学士会共催で理学部坂田・平田ホールで開催された「名古屋大学全学同窓会／学士会共催　講演会・夕食会」に、関東支部も協力しました。これは、東京の学士会館での講演会を地方でも開催し、全学同窓会員と名古屋在住学士会員が参加し交流を深める機会を提供するための試みで、北大、東北大に続き実施されました。今後も継続的に開催される予定です。

講演会は、柴田全学同窓会副会長、久保学士会理事長はじめ在学生も含む約200名の参加者を得ました。丹羽宇一郎全学同窓会副会長・関東支部長（前中国大使、学士会理事）により「グローバリゼーションと日本の将来」という演題で概要次のような内容の話がありました。

中国の現政治体制等についての豊富な知識と体験を踏まえ、日本の将来を考える際不可欠なグローバリゼーションにおいて、アジア最大の中国抜きには考えられない。その中国とは日米で緊密に連絡を取り共通の認識のもとに対応する必要がある。その他の日本の課題として、食糧・エネルギーと人口減少、少子高齢化に伴う社会保障・財政の健全化を指摘された後、「量」の中国と対抗するには日本はより高い「質」を目指す必要があり、そのためには若者の教育に最優先に投資すべきであると締めくくられました。

講演会後、有志参加のグリーンサロン東山内の「レストラン花の木」での夕食会に移り、参加者の相互の交流もはかられ盛会のうちに終わりました。

（関東支部幹事　側島文夫）

「名大若鯱会」平成26年12月東京にて

現役社会人の交流会「名大若鯱会」（不定期、20−50代中心・OB 枠有、文・法・経・理・工・農・情の40名弱が今回参加）を平成26年12月に開催しました。関東支部長の丹羽宇一郎さん（法・昭37）、奥村洋彦さん（経・昭39）がミニ講演をして下さいました。全学同窓会長豊田さん、内山田さん、橋本さん、アサヒビール柴田さん、キユーピー木村さん、二葉会東京支部長石川さん、セコイア会関東支部長石川さん、他多数（順不同）の同窓生の皆さんが協力して下さいました。開催時には詳細を名古屋大学メールマガジン等でお知らせしています。

（伊藤志織　法・平6）

■連絡先　名古屋大学全学同窓会関東支部
E-mail　nual-kanto@adm.nagoya-u.ac.jp

関西支部　NUAL Kansai Branch

関西支部では、下記の日程で第10回総会、懇親会を開催いたします。大学からは松尾新総長、伊藤代表幹事にもご出席いただきます。多くの皆さんのご参加をお待ちいたしております。

日　時：平成27年5月16日（土）14時から19時
総　会：筧　哲男（名大全学同窓会関西支部長）ご挨拶
　　伊藤代表幹事　会務報告
講演者：松尾清一（名古屋大学新総長）
題　目：未定
講演者：橋本孝之
　　（日本アイ・ビー・エム株式会社副会長）
題　目：「IBM のグローバル経営と、次世代 IT 技術がもたらす新たな社会」
懇親会：立食形式（予定）
場　所：中央電気倶楽部
　　大阪市北区堂島浜2丁目1番25号

講演内容、参加費等の詳細については、追って関西在住会員の皆さまには個別にご案内いたします。

また、全学同窓会ホームページでもお知らせいたします。

■連絡先　関西支部事務局長　脇田喜智夫
御所南法律事務所　TEL 075-253-0777
E-mail　office@goshominami.jp

国際言語文化研究科同窓会

国際言語文化研究科同窓会では、2014年10月18日（土）のホームカミングデーにおいて同窓会総会および修了生の里帰り講演、公開マラソン講座を開催しました。修了生の里帰り講演では、川尻和也氏（台湾国立虎尾科技大学助理教授）による「私の台湾における研究活動―陳火泉の日本統治時代の作品を中心に―」、李欣怡氏（台湾国立屏東大学助理教授）による「教師になって思ったこと」が発表されました。続く公開マラソン講座では「共起表現」をテーマに、堀江薫教授が「日本語と韓国語の文法化・借用現象に見える共起関係」、杉村泰准教授が「日本語と中国語の動詞と「慣れる」の共起表現の対照的考察」、稲垣俊史准教授が「動詞の下位範疇化における共起表現の第二言語習得」、早川杏子助教が「動詞と格助詞の共起関係と習得への影響要因」、玉岡賀津雄教授が「副詞と動詞の共起に関するコーパス研究と心的辞書の構造」について講演を行いました。同窓会総会後には修了生、在学生、教員を交えてティーパーティで交流しました。

■連絡先　勝川裕子
E-mail　yuko-k@lang.nagoya-u.ac.jp

公開マラソン講座

同窓会支援事業　NUAL Support Project

全学同窓会の活動理念に沿った名古屋大学の活動（学生活動、就職支援事業、本部・部局による行事・寄付講義等）を支援するため、公募型の大学支援事業を実施しています。

NUAL has an open invitation type support project for Nagoya University's activities (including student activities, employment support service, events and lectures) in harmony with the activity principle of the association.

国立七大学柔道部合同フランス遠征

申請代表者：瓜谷　章
（工学研究科・教授（柔道部部長））

国立七大学（東北大、東大、名大、京大、阪大、九大、（北大は都合により不参加））の柔道部部員17名が、平成26年9月4日より9月15日までの日程で、フランス柔道連盟の全面的な協力のもと、フランス遠征を行いました。引率責任者は、二村雄次（本学柔道部師範、本学経営協議会学外委員）が務めました。

国立七大学では戦前に盛んであった、いわゆる高専柔道の流れを汲んだ寝技中心の柔道を行っています。今回の遠征においても各地で国際ルールとは異なる寝技主体のルール、いわゆる高専柔道ルールのもとで試合を行ったことに大きな特徴があります。迎えるフランス柔道連盟も、以前より寝技中心の高専柔道に深い関心を寄せており、訪問する先々で七大学柔道部員と寝技柔道の手合わせを願う、多くの柔道家たちに出迎えられました。

今回の遠征では、クレイユ、アミアン、パリ、ペリグー、ボルドー、サンテミリオンなどを訪問することができ、各地で試合、合同稽古、寝技の指導などを行い、フランス柔道界との交流を深めることができました。試合は、寝技に慣れ親しんだ七大学側に凱歌が上がることが多かったですが、フランス国内でも上位に入る選手を選抜したジュニアチームには、さすがに苦戦させられました。

遠征を通して、学生たちが柔道だけではなくフランス文化に慣れ親しむことができたことも大きな成果の一つです。訪問する先々でレセプション、昼食会、夕食会と大歓迎を受け、柔道の合間に観光ツアーを企画していただくなど、まさに至れり尽くせりでした。サンテミリオンでは来日経験もある市長に表敬訪問することができたばかりでなく、逆にレセプションを開いていただきました。ほかにも現地の関係者の自宅にお伺いする機会が多々あり、観光旅行では決して味わうことのできない貴重な経験を積むことができました。また、フランスの地に、七大学の良い印象を残してくることができたと考えています。

末筆となりましたが、本事業の実施にあたり名古屋大学全学同窓会より多大なるご支援をいただきましたこと、衷心よりお礼申し上げます。

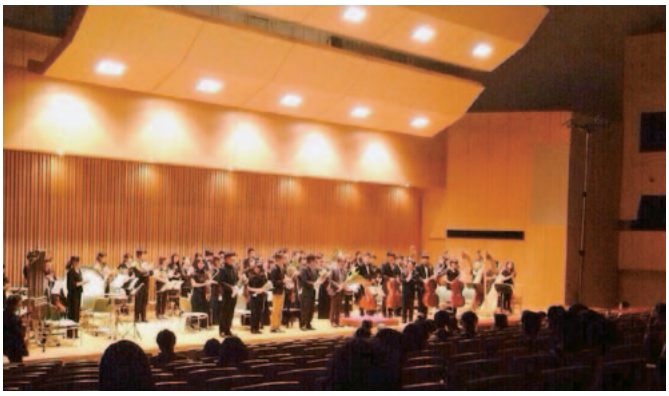
クレイユ（Creil）の道場にて

名古屋大学交響楽団×愛知県立芸術大学音楽学部有志「オーケストラ・プロジェクト」

申請代表者：金澤空木
（理学部生命理学科4年）

この度の「オーケストラ・プロジェクト」は名古屋大学交響楽団と愛知県立芸術大学の音楽学部の有志が集まり、豊田講堂ホールでコンサートを開催した。また芸術大学の作曲科の学生及び教授がこのオーケストラのために書いた“新作”を“初演”するという他に類をみない演奏会であった。

プロの作曲家である愛知県立芸術大学教授の小林聡先生の書いた新曲をアマチュアの学生オーケストラが演奏をするというのは両大学学生にとっても非常に貴重な体験であった。また今回の演奏会では北欧を中心に活躍されていて、現代



演奏会当日

音楽作品に力を入れていらっしゃる野津如弘先生をお招きし、日本を飛び越えて、世界で活躍されている音楽家の感性を、奏者をはじめ、聴きに来てくださったお客様も間近で感じることが出来た。そして近代音楽の芸術性を学ぶことが出来たのと同時に、大学間での音楽を主とした芸術文化交流も行えた。

演奏会後は指揮者の野津先生はじめ、もう一度行いたいという声も多く今後も何らかの形で名古屋大学と愛知県立芸術大学間の文化的な交流を続けていけたらと強く願っている。

最後になりましたが、この度の演奏会にあたって名古屋大学全学同窓会支援事業より甚大なご支援して頂いたことを、深く感謝申し上げます。

名大発国際人材輩出へ向けたキャリア形成支援強化

申請代表者：今井千晴
（国際教育交流センターキャリア支援部門　特任講師）

近年、産業界からますますグローバル人材輩出への期待が高まる中で、そのニーズに応えるべく、国際人材輩出へ向けたキャリア支援活動を実施した。前年度、同じく全学同窓会大学支援事業として採択された「グローバル人材育成プログラム」について、関係者の間で振返りと当年度に向けての改善検討を行い、学生総合相談センター、企画・学務部学生支援課就職支援室、そして新たに、海外留学室と連携し実施することとなった。また、学生からの要望を汲み、ワークショップについては1セッションにつき平日と週末の2度に渡り同内容で開催することで、授業の都合上平日の参加ができなかった学生に配慮した。また、今年度も引き続きリーディング大学院プログラムのスキルセミナーとしても参画することになった。

平成25年度については、181名の学生からの参加があっ

た。そのうち102名は、留学経験または留学を考えている日本人学生が占めていることから、内向き思考と言われてきた日本人学生だが、積極的に英語を使い留学生とコミュニケーションを図ろうとする、国際意識の高い学生が前年度と比較し増加した印象を受けた。また、企業との連携によるセッションの提供も拡充した。若手の企業人事担当者が学生とディスカッションを行う回の継続、また、地元企業経営者と外国人留学生の英語による座談会を実施した。特に名古屋大学同窓生も所属する中部経済同友会との連携により実施した回については、留学生とは英語での対応をお願いした。その結果、19カ国、27名の外国人留学生・日本人学生からの参加と国際色豊かなイベントとなり、大変盛況であった。企業側から留学生へ歩み寄ってくれたという印象をもつ参加学生が多く、日本企業に対するイメージが変わったという感想も聞かれた。企業側、参加学生側からの反応が非常によく、次年度の開催も決定した。

平成25年10月に行われた国際組織の改組により、国際交流協力推進本部キャリアデベロップメントオフィスは、国際教育交流センターキャリア支援部門として、新たに始動した。部門立ち上げに伴い、申請時にも触れていた、留学生向けの就職活動についての冊子も、キャリア支援部門と関連部門の紹介コンテンツと組み合わせる形で作成した。これは、新入生オリエンテーションや、就職関連イベントの際や、企業へのアプローチの際に配布するなど、様々な場面で活用している。

全学同窓会大学支援事業に採択して頂いたことにより、外国人留学生はもとより、国際意識の高い名大生へのキャリア支援の質向上、拡充などに注力することができた。また、本取り組みをきっかけに生まれた、企業との新たなネットワークや、名大生と企業との接点など、その恩恵については枚挙に遑がない。名古屋大学全学同窓会会員の皆様に心より御礼申し上げたい。

この実績をもとに今後よりグローバル人材の育成支援に尽力したい。

『名古屋大学附属図書館蔵水田文庫貴重書目録』刊行記念講演会

申請代表者：佐野　充
（附属図書館長）

平成21年度と平成23年度に2回にわたって購入した図書および雑誌を中心とした水田洋名誉教授の旧蔵書のうち、貴重書を収録対象とした『名古屋大学附属図書館蔵　水田文庫貴重書目録』を平成26年11月に刊行した。これを記念し、幅広い分野の研究・調査に携わる研究者等が水田文庫の有効活用と高度な学術成果を得られるよう、名古屋大学全学同窓会の支援を受け、平成26年12月7日（日）、附属図書館5階大会議室にて本講演会を開催した。参加者は学内外の研究者を中心とした47名であった。

講師に、目録の序文を寄せていただいた坂本達哉慶應義塾大学経済学部教授のほか、水田名誉教授に師事した山田園子広島大学社会科学研究科教授、安藤隆穂本学高等研究院長（経済学研究科教授）を迎え、それぞれの立場から水田文庫についてその成り立ち、五層構造になっている水田文庫の特徴、OPAC での水田文庫の検索手法、水田文庫の一部が中国浙江大学に寄贈されて活用されていることなど、広範な解説があった。講演終了後、講演会に来場された水田名誉教授からもコメントをいただき、質疑応答の他、活発な議論が行われ、有意義な会となった。

地元企業経営者と外国人留学生の交流＆懇談会の様子

参加者からの質疑応答に答える水田名誉教授

■同窓会・大学行事カレンダー

全学同窓会、部局同窓会、及び、大学に関する行事が下記のとおり開催されます。

詳細は、全学同窓会ホームページ http://www.nual.nagoya-u.ac.jp/ をご覧下さい。

○平成27年度　鏡ヶ池会東京支部総会

土木系卒業生の同窓会である鏡ヶ池会の東京支部（会員600名以上）の年間最大行事である支部総会です。平成26年度は94名が参加しました。

日　時：平成27年11月20日（金）　18:30～20:30
場　所：主婦会館プラザエフ　B2F　クラルテ
http://www.plaza-f.or.jp
〒102-0085　東京都千代田区六番町15番地
TEL. 03-3265-8111（代表）
FAX. 03-3265-8581
JR 四ツ谷駅　麹町口前（徒歩1分）
東京メトロ南北線／丸ノ内線　四ツ谷駅（徒歩3分）
連絡先：YSC　株式会社横河システム建築
企画＆監査　寺尾圭史（てらお　けいじ）
〒299-0268　千葉県袖ヶ浦市南袖11番
TEL. 0438-62-6421　FAX. 0438-62-5441
E-mail：k.terao@yokogawa-yess.co.jp
URL：http://www.yokogawa-yess.co.jp

○遠州会

1）名古屋大学遠州会20周年記念
「ノーベル賞受賞 天野浩 名古屋大学大学院教授 特別講演会」

日　時：平成27年6月13日（土）15:00～17:00
場　所：静岡文化芸術大学　講堂（浜松市）
定　員：600名
会　費：無料
遠州会会員、地元の名大同窓生・高校生・一般市民を対象としています。

2）第20回名古屋大学遠州会同窓会

日　時：平成27年6月13日（土）18:00～20:40
場　所：オークラアクトシティホテル浜松
総長、伊藤義人代表幹事、天野浩教授にもご出席をお願いしています。

連絡先（講演会、同窓会共に）
名古屋大学遠州会事務局長　原田憲道
E-mail：enshuhrd@yahoo.co.jp

○関西支部第10回総会・懇親会

日　時：平成27年5月16日　14:00～19:00
場　所：中央電気倶楽部（大阪市北区）
連絡先：関西支部事務局長　脇田喜智夫
御所南法律事務所　TEL　075-253-0777
E-mail：office@goshominami.jp

事務局からのお知らせ　From the NUAL Office

●支援会費のお願い　Call for contributions

名古屋大学全学同窓会の活動は、皆様からの支援会費、寄附金に支えられています。支援会費は年度ごとのお支払いとなります。皆様のご協力をお願いします。

○支援会費　Supporting Fee

支　援　会　員　Supporting member　：一口　5,000円
支援法人会員　Supporting institution：一口　50,000円

○支払い方法

郵便振替 Post Office Account　口座番号：00860－8－113043
自動引落 利用ご希望の方は、預金口座振替依頼書をお送りしますので、同窓会事務局にご連絡ください。

「名古屋大学カード」の入会のご案内

～ 名古屋大学カードで繋がる大学支援 ～

全学同窓会は、同窓生と母校との連携強化・大学支援の充実を目指し、
「名古屋大学カード」を発行しており、利用金額の一部が同窓会に還元されます。

◆名古屋大学カード ～ ゴールド ～

加入者は**12,000**名を超えています。

年会費無料!　家族会員様も1名様に限り無料。
ポイントがたまる!　家族会員様のご利用分もまとめて本会員様へ付与。

- 国内・海外旅行傷害保険付帯　最高3,000万円
- ショッピング保険　年間補償限度額 200万円
- 空港ラウンジサービス

◆名古屋大学 MUFG CARD Platinum American Express® Card

プラチナ会員様限定の上質なサービスと快適性を兼ね備えた、最高の1枚。

- プラチナ会員様専用の特別なサービスを多数ご用意
- 初年度年会費半額優遇キャンペーン実施中

20,000円（税別）⇒10,000円（税別）

※キャンペーン期間が延長となりました！　2016年3月31日（木）まで
名古屋大学全学同窓会事務局　入会申込受付分まで

～プラチナ会員様専用の特別なサービス～

最上級のホスピタリティを、世界中で

プラチナ・コンシェルジュサービス

専任のスタッフが、24時間365日、会員様のご相談やご要望を承ります。

大切な方とのお食事のひとときに

プラチナ・グルメセレクション

国内の厳選された有名レストランのコースメニューを2名様以上でご利用いただいた場合に、1名様が無料になるプラチナ会員専用のグルメ優待サービスです。

入会方法について

① WEB からのご入会を希望の方
名古屋大学全学同窓会 HP からお申込みください
⇒ http://www.nual.nagoya-u.ac.jp/

②入会申込書からのご入会をご希望の方
名古屋大学全学同窓会へ入会申込書のご請求ください
⇒ TEL／FAX：052-783-1920（受付：9:00～17:00）

名古屋大学　MUFG カード・プラチナ・アメリカン・エキスプレス®・カードはアメリカン・エキスプレスのライセンスに基づき三菱 UFJ ニコス株式会社が発行・運営しております。「アメリカン・エキスプレス」はアメリカン・エキスプレスの登録商標です。

編集後記

赤﨑・天野両先生の2014年ノーベル物理学賞受賞の記事で、読者の皆様に受賞の様子や受賞をもたらした名大の教育･人材育成精神が少しでも伝われば幸いです。また、濵口総長へのインタビューでは、急速に進行している大学の国際化の中、全学同窓会の役割やあるべき姿が、会員の皆様に共感していただければと存じます。今後とも皆様のご支援とご協力どうぞよろしくお願い申し上げます。

（全学同窓会広報委員会）

NUAL Newsletter　No.23　平成 27（2015）年 3 月発行
Nagoya University Alumni Association
NUAL 名古屋大学全学同窓会
〒464-8601 名古屋市千種区不老町　TEL/FAX 052-783-1920
E-mail nual-jimu@adm.nagoya-u.ac.jp
ホームページ　http://www.nual.nagoya-u.ac.jp/
編集：名古屋大学全学同窓会広報委員会